

# しが国際協力親善大使レポート

かわひら さよ  
川平 紗代さん

隊次：2019年度2次隊

職種：環境教育

派遣国：ドミニカ共和国

## プロフィール

大津市出身。大学在学中にインドとフィジーに留学し、環境問題が市民の日常生活に与える影響の大きさを目の当たりにし、衝撃を受ける。「何とかして状況を変えなければ」という強い衝動にかられ、オーストラリアでビジネスとサステナビリティの関係を学び、そのまま移住。様々な職種を経験しながらサステナビリティ分野のリサーチャーとして働き、2019年から環境教育分野の青年海外協力隊としてドミニカ共和国に派遣。2021年12月帰国。

## 活動国の地域の気候や文化の紹介

ドミニカ共和国はカリブ海に浮かぶイスパニョーラ島と呼ばれる島の右半分を占めており、国土は九州と高知県を足した程と小さく、スペイン語を話します。とても賑やかで、親切な方が多く、そこら中から大きな笑い声が聞こえてくる、そんな大阪のおばちゃんが集まった様な国です。またそこに、メレンゲやバチャータなど、ラテン音楽が加わり、道・オフィス・ビーチ、関係なくどこでも踊っています。一年を通して暖かい熱帯サバナ気候と自然豊かな国土が、ドミニカ人を陽気にさせるのかも知れません。



Photo 1 ビーチで子ども向けのエコラリーを行なった環境省の同僚と撮った写真。



Photo 2 自然豊かなドミニカ共和国。環境ツアーガイドの方が「ドミニカ共和国は乾燥地帯もあれば、熱帯雨林もある。全部の気候が存在するんだ！だから様々な風景を楽しむことができるし、週末に車で4時間も走れば国の端まで行けるから、この国は最高！」とっていました。



Photo 3 原住民であるタイノ族の壁画が残っている洞窟の中





Photo 4 パステレス・デ・オハと呼ばれるクリスマスシーズンに食べるドミニカ共和国の料理。キャッサバや甘くないバナナを潰し、中に野菜や鳥など詰めて、バナナの葉っぱで包み茹でたもの。キャッサバのものはもちもちでとっても美味しいです！

## 活動や生活について

派遣当初は、プエルトプラタと言われる地方都市の上下水道協会子ども・一般市民を対象とした、飲料水・衛生・環境に関する環境教育を行なっておりました。しかし、COVID-19の蔓延により日本に一時帰国をせざるを得なくなりました。日本でちょうど1年間過ごした後に、晴れてドミニカ共和国に戻ることができました。所属は変わったものの、もう一度ドミニカ共和国で環境教育に携わることができてとても嬉しかったです！

新しい所属は環境省の環境教育部。そこでは国内の観光地がエコツーリズムを打ち出せるよう、ローカルガイドの環境意識を向上させる取り組みや、コミュニティ内で環境リーダーを育成する活動、子供たちへの環境教育、企業が環境に配慮したオフィスに変換していく手助けなど、本当に幅広い活動を行なっておりました。

カリブ海のビーチやリゾートで知られるドミニカ共和国は観光業を中心に経済成長を続けていますが、観光業の発展に伴って環境汚染も深刻化しつつあります。街中ではごみが屋外投棄されており、適切に管理されていないごみ処分場も目につきます。自治体が行っているごみの回収システムそのものに改善の余地があり、リサイクル率が上がらないのも問題の一つです。市民に環境保護の意識がないわけではないのですが、それが行動に結びついていませんでした。

そこで、環境問題を“自分ごと”として身近に考えてもらい、問題を一緒に解決していくために年齢や環境によってワークショップを行う際のネタを工夫することにしました。

小学校低学年にはドミニカ人にとって馴染みのあるウミガメになってもらい、環境問題から起こる被害を擬似的に体験してもらいました。子どもたちは「かわいそう。これは私たち人間のせい？」「どうやったらウミガメを助けられるの？」と、たくさんの声があがりました。調理

師やホテルマンになるための専門学校に行った際には “ゴミ” に焦点を当て、将来働くであろう調理場やホテルから出るゴミの量やどのように減らすことができるのかについて、市民の方々には環境問題が健康や町の安全と深く結びついていることに焦点を当ててお話をしました。

様々な人に環境教育を実施する中で、キラキラした目で楽しみながら環境について学んでくれる子どもたちへの環境教育が一番印象に残っています。子どもたちはいろいろな情報を素直に受け止めてくれるだけでなく、子どもに教えたことはそれぞれの家族から地域コミュニティ全体に広まります。つまり、子どもたちをきっかけに街全体の意識を変えることができるのです。子どもや若者の環境意識を高めることは、国の未来を変えること。環境教育の素晴らしい可能性を再認識することができました。

パンデミックにより2年のドミニカ共和国での活動が1年となってしまいましたが、地方都市と首都、両方で環境教育を行うことができたこと、様々な背景を持った方々と活動ができたこと、そして一時帰国中に地元の小学校で子どもたちと一緒に勉強できたこと、行動制限など大変な事は多々ありましたが、パンデミックがあったからこそその経験も沢山できました。

環境教育隊員としての任務は終了しましたが、これからも世界から環境弱者をなくし、多くの人が幸せを感じることが出来るサステイナブルな社会を作る事を目標に、日々邁進していこうと思います。



Photo 5 地元の小学生に環境教育を行った際の様子。講義後、子どもたちが「家に帰ったら家族にも教えてあげるんだ」と言ってくれたことが本当に嬉しかったです。



Photo 6 ビーチでの環境教育の様子。

子どもたちが協力して国花であるロサ・デ・バジャイーベのパズルをしているところ。



Photo 8 実際のビーチクリーニングのひとつコマ。  
網を使って細かな発砲スチロールのごみを取り除いていきます。気の遠くなる様な作業で、マイクロプラスチックの厄介さを身をもって体験。



Photo 7 地方都市で行った環境教育活動の様子。  
美化活動の一貫として地元市民と一緒に建物の壁をペイントしているところ。





Photo 9 観光客のためにビーチクリーニングを実践するエリアでは美しい砂浜が広がっているが、そのエリアを離れると、ポイ捨てごみや海から漂着するプラスチックごみまでが散乱。公衆衛生の問題も発生しています。



Photo 10 川にもゴミがいっぱいです。便座やドアまで沢山のゴミが不法投棄されています。



Photo 11 ビーチクリーンが定期的に行われている美しいビーチ。



Photo 12 ワークショップや教材作りなど、一緒に活動した環境教育部のメンバー。



Photo 13 とても良くしてくれた同僚の家族。彼女はコロンビア出身で自身が外国人であることから、外国人であることの大変さを理解してくれ、沢山助けてくれました。また、彼女の娘が日本が大好きで「日本語を学びたい！」ということだったので週に一回Zoomで日本語教室を開いていました。



Photo 14 プエルトプラタ市で勤務していた時に、仕事終わりに日本語を教えていたグループ。中学生から89歳まで幅広い年齢層の方々に地元の図書館で日本語教室を開いていました。みなさん日本のことが大好きで、日本のアニメとゲームの力の強さを改めて実感。高校の数学の先生は日本語がとても上手で、日本語のワンピースの漫画を持っていました！